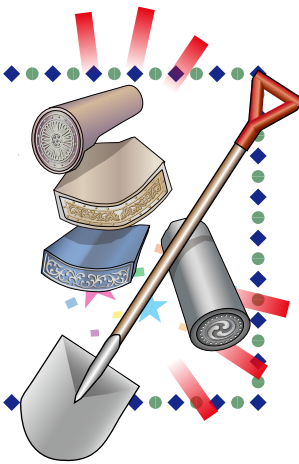


へいあんきょうあと おどいあと (みぶにしどいのうち) 平安京跡・御土居跡 (壬生西土居ノ内町)

調査期間：令和5年11月7日(火)～ 12月8日(金)

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 調査地の歴史と環境

調査地は京福電鉄西院駅の南に位置し、「西土居ノ内町」の地名が示す通り、大正時代初期まで御土居が現存していた場所です(図1)。御土居は、豊臣秀吉によって天正19年(1591)に築かれた京都を囲む^{どるい}土塁と堀で、南北約8.5 km、東西約3.5 km、総延長約22.5 kmもある巨大な^{そうがまえ}惣構でした。その西辺の南半(丸太町通より南の範囲)は、平安京の街路である西堀川小路と重なります。

西堀川小路の中央には、人工河川である「西堀川」が開削されていました。ただし、西堀川は平安時代に起きた複数の洪水で、中世後半には埋もれ、その跡は堤防状の高まりになっていたと考えられています。調査地周辺の御土居は、この高まりを利用して作られました。

平安京が立地する京都盆地は、西の右京側が特に治水の難しい地形をしています。北東が高く北の^{こうばい}勾配が強い^{ゆる}ため、三条通以南は傾斜が緩い範囲が広く、水を集めて流すのが難しいのです。

この結果、西堀川は高い頻度で洪水が起こっていたようです。西堀川小路跡の発掘調査では、どこでも洪水由来の砂礫が厚く堆積している状況を確認しています。

2 今回の調査成果について

今回の調査では、南北の少し離れた位置に2つの調査区を設けて調査を行いました(図2)。その結果、シルトの地山の上に厚い洪水砂が堆積している状況を確認しました(図3)。この洪水砂はよく観察すると、いくつかの面を持っています。そこで面の上を平面的に検出し

たところ、西堀川小路東側溝および綾小路北側溝が見つかりました。

道路側溝は、2～3面ある面のほぼ同じ位置で検出されたことから、複数回掘りなおされていたことがわかりました(図4)。西堀川小路および綾小路はともに重要な道路だったため、平安時代の間は洪水後に災害復旧作業が行われていたことがわかりました。

また、南北二つの調査区のうち、高い側の2区よりも低い側の1区の方が、洪水砂がより厚く堆積していることもわかりました。1区は東西方向の道路である綾小路との交差点に位置しているため、綾小路に沿って流れてきた砂も堆積したものと考えられます。大洪水の時には西堀川だけではなく、道路にも水が^{あふ}溢れていたことが確認されました。

今回の調査地では、平安時代より後の土地利用はあまり活発ではなく、鎌倉時代の終わり頃には、部分的に水田が作られていたようです(図5)。そのため御土居の盛土は一部しか残っていなかったものの、中世に自然堤防状の高まりとなった西堀川の堆積を利用していたことがよくわかりました。

また地山^{じやま}以下では、2万5千年以上前と想定される低位段丘構成層の一部である泥炭層とそれを切る流路を検出したこと(図7)、地山直上では流路以外の遺構が確認されなかったことから、平安京への遷都以前は、流路が流れ込むような地形であり、平安時代前期に西堀川小路が造成された時点では、すでに^{はんらん}氾濫由来の砂礫が堆積していたこともわかりました。

四条通よりも北側で行われた過去の調査では、地山(シルト)の上面で西堀川小路の側溝を確認していましたが、南側では砂礫が広がる土地にも道路側溝を施工していたようです。(赤松 佳奈)

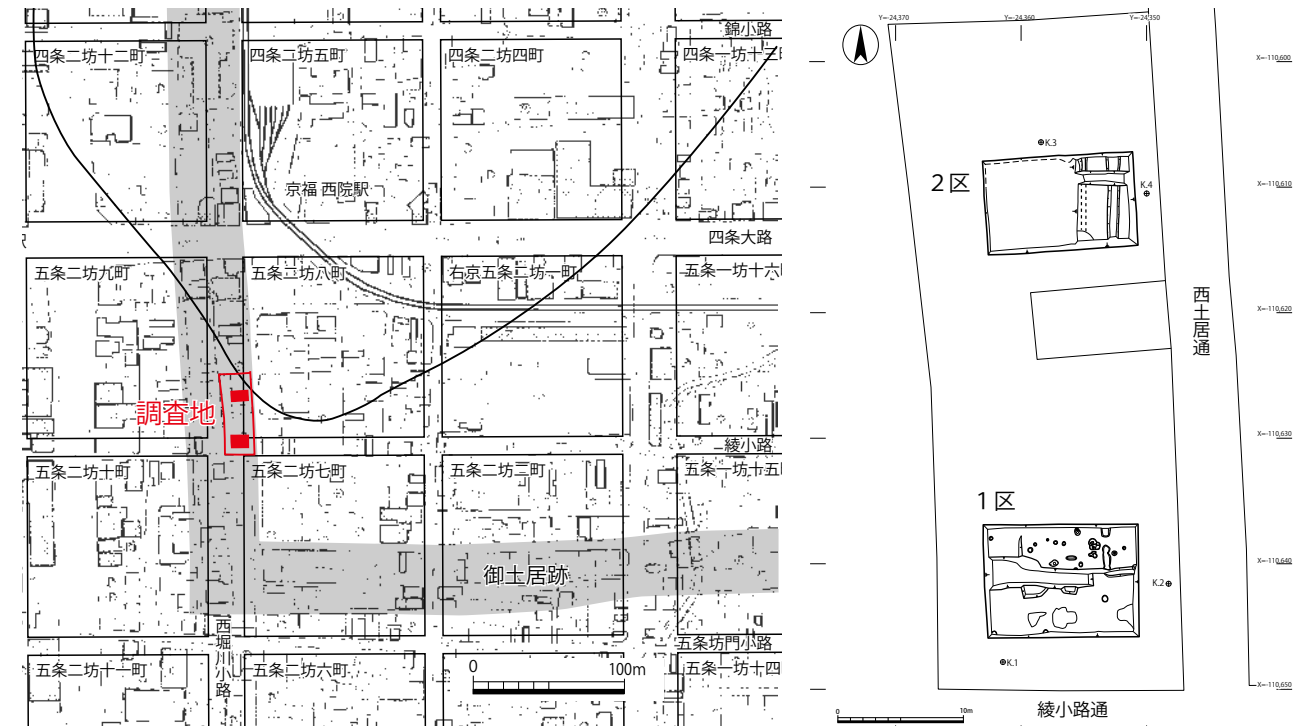


図1 調査地点位置図

図2 調査区配置図



図3 厚く堆積する砂礫層(1区断面 南から)

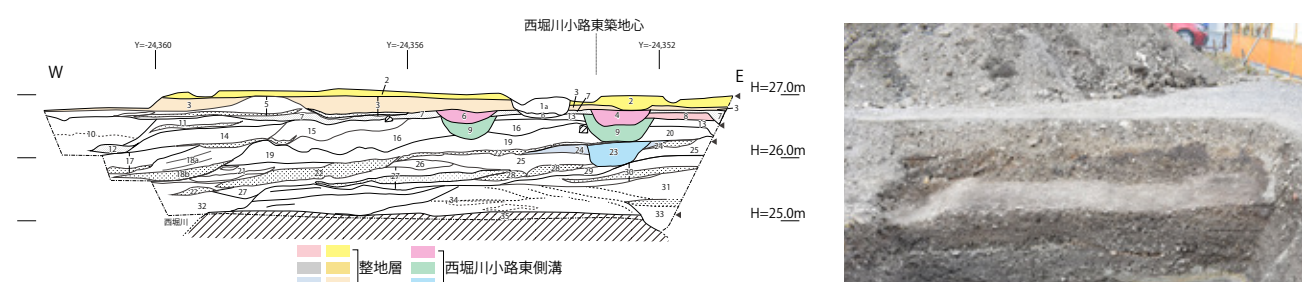


図4 1区中央壁(図3)の断面図



図5 水田畦畔(2区北西から)

図6 1区全景(南東から)

図7 2万5千年以上前の地面(2区 最終面)